

国立中国児童芸術院『十二月』公演  
於：THEATETR1010

07年も暮れようとする師走の北千住のホールで国立中国児童芸術院『十二月』（主催：社団法人日本児童演劇協会）の訪日公演を観劇。

『十二月』は日本では「十二月物語＝森は生きている」といった方が一般的には馴染み深い、原作はロシアのサムイル・マルシャークで児童文学の金字塔的作品。

中国の劇団が翻訳劇をどう表現するのか、楽しみに劇場に向かった。

映画『黄色い大地』で主演を演じた薛白(Xue Bai)が出演しているのも興味があった。

91年に故・千田是也演出での日本版？『十二月』を都市センターホールで見ているがその比較も密かな楽しみでもあった。

日本版は丁寧に重厚に作られてはいたが少々テンポが遅い印象であった。今回の中国版はスピード感溢れる楽しい雰囲気になり、舞台両サイドの字幕を追うのを惜しむほどであった。演出は舞台転換をも芝居の流れを断ち切ることなく配慮され一瞬にして世界が一変する様は見事、難を言えば音響が総じて大き過ぎたのが少々残念ではあった。

国柄の違いも随所にみられ京劇風の所作や少数民族に想を得た衣装と踊りの鮮やかに彩りされ「とある国での物語」が架空の国として浮かび上がり象徴性が増した。

特に言語の違いは面白く、中国語の持つ直接性が際立った。

終幕近く薛白演じる“みなしご”の悲嘆にくれた叫び、悲しみや喜びは「越劇」での昂まって行く感情に似たものがあった。

日本版がリアリズムであるならばメルフェンに徹した感じであったが、そこはお国柄と言うよりは現代の捉え方の違い。

“十二の月の精”達が自然の理(ことわり)の具現者としての存在は、自然破壊への警鐘ともとれるが今や自然崩壊に直面した私たちへの大自然からのエールとも言える。

十二月最後の日(大晦日)から新年にかけて繰り広げられる物語は新しい年を迎えるに相応しく、来る年に希望を持つテーマは暖かい。何より気持ち良いのは登場人物(我儘な女王でさえ)を肯定的に見守っていること、そして自然“十二の月の精”が人々を善に導く世界は希望そのものに思える。

昨年(07年)は「日中国交正常化35周年」で記念公演や文化交流事業が日中間で数多くあった。今回の舞台も文化庁の支援を受けた記念事業であったが東京だけでなくもっと多くの都市での再来日を期待したい。

事務所としても文化交流は永続的なテーマ。「シルクロード・シリーズ」と銘打った中国楽器等の小コンサートを実施し好評を得た、今後も草の根的なコンサートも含め幅広く展開することを初夢としたい。

映画『黄色い大地』原題「黄土地」1984年公開、陳凱歌監督作品

『越劇』は中国浙江省の農村芝居から始まり近代の上海で女性演劇として花開いた「中国の宝塚」と呼ばれている。